

平井尚志の なめとこ山通信



第67回 ウルトラマンと清少納言

皆さんこんにちは。コロナウイルスの感染者数何人という数字を毎日見ている、落ち着いたなあと感じたり、なかなか0にはならないなあと思ったり、これってつまり、ウィズ・コロナの日常が始まっているってことだろうと思う今日この頃です。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。ところで、マスクの着用について、政府の見解も示されましたが、皆さんマスクはどうされていますか。厚生労働省の「インフルエンザ発生状況報告数推移」という資料を見てみたんです。インフルの流行は、この2年、本当に激減していますね。これってやっぱり、みんながマスクをして過ごしたからなのかなと思いました。だからこれからも、マスクの生活はありかなとは思っています。ただ、私は最近、家から駅まで一人で歩く時間は、マスクを外して朝の空気を気持ち良く吸うようにしています。皆さんそれぞれ、健康にお気を付けながら、シン日常を楽しくお過ごしください。

さて今回のなめとこ山通信は、コロナの話題で始まりましたが、コロナとは関係ありません。少しずつ外へ出歩けるようになって、もうちょっとしたら「山に行って来ました」って報告もしたいところですが、今回は、最近見た映画と読んだ本の話です。思いついたことをまたダラダラと書いていますので、お時間ありましたら、どうぞお付き合いください。

先日、映画館で「シン・ウルトラマン」という映画を見てきました。2017年の日本アカデミー最優秀作品賞「シン・ゴジラ」のスタッフが作った、ウルトラマン映画です。ところで、シン・ウルトラマンとかシン・ゴジラとかの、シンっていったい何？って思う人もいるでしょうが、それは、「新」でもなく、「真」でもなくてところで、「シン」なのだそうです。この言葉遊び、都庁の偉い人も気に入ったようで、都政の構造改革のキャッチフレーズが、「シン・トセイ」なんですよ。どうなのそれって感じもしますが、冒頭で私も、「シン日常」って書いてしまいました。まあ、そんなふうに使ってください。

さてその、「シン・ウルトラマン」ですが、面白かったです。笑えるところもあったし、やっぱり懐かしく感じる場所もあったしで、楽しめました。そうして、最近考えていたこと、SF小説『三体』を読んで、なるほどと思ったことが、改めて腑に落ちて、やっぱりそうなんだよなって印象でした。（「なめとこ山通信 63 宇宙にいるのはわれわれだけではない、のか本当に？」の中で、そんなことを書きました。あ、そうそう、「宇宙にいるのはわれわれだけではない」ってのは、映画「未知との遭遇」のキャッチコピーですよ。それも懐かしい！）あんまり書くとネタバ

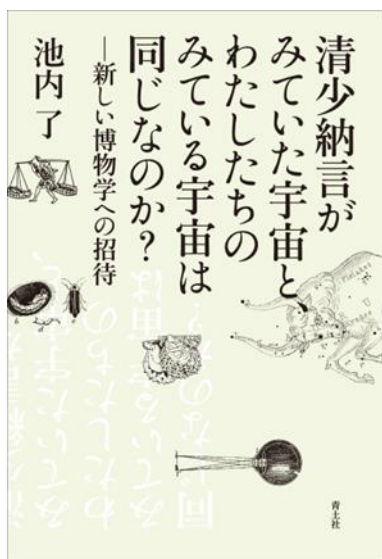
レになってしまうので、ここでは詳しくは言いません。映画のDVDがレンタル解禁になったら、どうぞ御覧になってみてください。ウルトラマン世代の皆さんには、おすすめです。ウルトラマンがああ頃よりかっこよくて、泣けてきます。何しろ背中ファスナーがないんです。制作者のこだわりだったようで、シン・ウルトラマンには、何かを着ている感はまったくなくて、そこは、今の時代の映像技術のなせる技なのでした。シン・ウルトラマンの、背中の筋肉とかに注目してみてください。

子どもの頃、ウルトラマンを見ていて(私の場合は、帰ってきたウルトラマンや、ウルトラマンAだったかな。)わくわくしながらも、ウルトラマンの背中にはファスナーがあるなって思ったりしていませんでしたか。いや、子どもの頃はどう思っていたのかな。ちょっと大人になって冷めた目で見られるようになって、ウルトラマンなんていないんだって感じ始めたのだったか……。大人になって、シンガーソングライターのスガシカオの「ファスナー」という歌(作詞はミスチルの桜井さんでした。)に、「ウルトラマンのファスナー」というフレーズが出てきて、大人になるってそういうことだよなと思ったりもしたものです。



きっとウルトラマンのそのように
君の背中にもファスナーが付いていて
僕の手の届かない闇の中で
違う顔を誰かに見せているんだろう
そんなの知ってる

でも、繰り返しますがシン・ウルトラマンの背中には、ファスナーは見えませんでした。かっこ良かったです。もしかしたら、(いや、もしかしなくても、)子どもの頃って純粋に、ウルトラマンの背中にはファスナーは、見えていなかったのかもしれないね。あの頃の自分はどんなふうに見ていたのだろうかなんて、もう思い出せないものなのかもしれません。



ところで、たいへん強引なこじつけになりますが、「あの頃の～はどう見ていたのか」繋がり、凄く気になる本のタイトルを目にしたんです。それは、『清少納言がみていた宇宙と、わたしたちのみている宇宙は同じなのか?』(著者:池内了 青土社)という本です。サブタイトルが「新しい博物学への招待」ということで科学読み物系の本のようにですが、もうク

ラクラするほど気になっていて、先日とうとう手に入れてしまいました。池内さんの著書は、『ねえ君、不思議だと思いませんか？』というのも持っていて、つまりそれもタイトルに惹かれて買っているんです。これは、池内さんの作戦に乗せられちゃってるなと思いつつ、清少納言と宇宙？というのが気になってしまったのです。

『枕草子』二五四段の中で、清少納言は次のように書いています。

星は すばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて

星は 昴。ひこ星。宵の明星。よばい星は、ちよつと面白い感じ。尾を引いていなければ、なお
良いのだけれど。 (訳：酒井順子)

清少納言の時代にも、スバル(プレアデス星団)は、夜空にあって、見上げる人の目を惹いていたんだなあって、思ったんです。でもそれを疑ってみるのが、科学者の池内さんで、つまり、清少納言は本当に夜空を見上げたりしていたのかなってということらしいのです。確かに当時の貴族女性は、昼間でさえそうそう外へ出たりせずに、屋敷の中の御簾の内に姿を隠していることの多かったはずですから、実際なかなか夜に星を見上げるといことは、なかったかもしれません。(夜の暗闇なんかは、普通に怖かった時代です。多くの方は、鬼の存在を信じていたのですから。)池内氏の推理では、清少納言は、源順の『和名類聚抄』に倣って、「すばる」や「ひこぼし」等の名前を並べて、「星づくし」としたのではないかということでした。ちなみに「よばひ星」というのは流れ星のことです。流れ星なら、「尾を引いていない方が良い」というのは、やっぱりなんだかおかしい気がしますよね。清少納言は、「夜這い星」という名に引かれて、それなら跡を残さない方が良いわね、と書いているようなのでした。もし本当に、清少納言が、夜、外に出て星を見上げるような人だったら、例えば流星群が見られるような夜に出くわして、きっとその時の感動(あるいは恐怖?)を、もっとリアルに枕草子の中に綴っただらうと、私も思うのでした。

私は子どもの頃、ウルトラマンが M78 星雲の光の国からやって来たのだということを知っていました。でも、M78 星雲なんて、もちろん見たこともありませんでした。映画「シン・ウルトラマン」では、米津玄師がエンディングに流れる主題歌を歌っていました。そのタイトルは「M 八七」なのですが、ん？ 78 じゃないの？って思ったんです。ちょっと調べてみるとわかってきました。そもそも、初代ウルトラマンの故郷である光の国は、企画段階では M87 だったのだそうです。それが、台本への誤植によって、M78 になってしまったそうなのです。米津玄師はそのことを聞いて、主題歌のタイトルを「M 八七」に決めたそうです。そんなことを聞いてしまうと、M78 星雲だろうが M87 星雲だろうが、どっちだって良いじゃんみたいな感じになりますね。でも実際には、M78 星雲も、M87 星雲も存在しています。M78 はオリオン座の中にある星雲で、地球からは 1600 光年離れています。M87 の方はおとめ座の中にある銀河で、地球から

は 5500 万光年も離れており、巨大ブラックホールがあるとされています。見たこともないものに思いを馳せるのは、清少納言の時代も私たちも、同じということですよ。

もう一つ、清少納言繋がりになりますが、本の話です。今、『清少納言を求めて、フィンランドから京都へ』という本を読んでいます。まだ読み終わっていないのですが、これがなかなか面白い本です。筆者は、ミア・カンキマキさんというフィンランド人女性です。彼女は、偶然『枕草子』の英訳版を知ること、その内容と、何より清少納言という女性に魅せられてしまいます。そして見たい知りたいが募って、とうとう日本語もわからないまま日本に来て、京都に滞在するという、これはその記録本です。読んでまず、カンキマキさんの行動力に圧倒されます。清少納言の枕草子からの引用も所々にあって、それが新鮮です。枕草子って、こういう随筆だったかと、新しい発見をした気になります。さらに、自分も京都を旅しながら、何かにインスパイアされた気持ちにもなります。ついでに、フィンランド語から日本語に、この本を翻訳した訳者・末延弘子さんの仕事に、頭が下がります。



セイ、ぼんやりとだけど、あなたと関わって考えたことが二つある。

一つめ。千年前にあなたが着目したことの多くが、驚くほど身近で、まるで私に話しかけているみたいにホットな話題だということ。二つめ。ジャンルとしての「随筆」は、何だかとても現代的で、個人を話題にしていたり、断片的だったりするところがブログのルーツか何かにする感じということ。

筆者カンキマキさんは、清少納言のことを「セイ」と呼んで、ことあるごとに話しかけます。そうすると、千年も前に私たちの国に生きた女性である清少納言が、私たち読者にとってもなんだか身近に息づいて蘇ってくるのです。何とも不思議な体験です。まだ途中までしか読んでいないので、色々お伝えできないのが残念です。筆者は京都で生活して、何を発見するのか、あるいはしないのか。毎日この本を読むのが楽しみです。

先日、2024 年の NHK 大河ドラマは、紫式部を主人公とした「光る君へ」に決まったという報道がありました。平安時代なんだ！ということと、紫式部かあという驚きもあり、このニュース

を聞いていました。平安時代がブームになるのかな、とか、じゃあ清少納言は誰に？ということも思いました。ちなみに紫式部は、吉高由里子さんだそうです。朝ドラの花子じゃん！色々楽しみです。もう、千年も前のことを、わかっていることわからないこと含めて描くのですから、脚本の大石静さんには、いっそウルトラマンも登場させてもらって、科学という概念のなかった世界を、暗闇や夜には魑魅魍魎が跋扈した世界を、それでいて(だからこそ)人間の想いの熱かった世界を、自由に描いて欲しいなあと思いました。あ、自分だったらそうするかも、ということかな。

ウルトラマンって、簡単に人間をひねり潰してしまえる体力も科学力も持っている宇宙人なのですが、人間を助けようとするんです。では、助けられる側の人間ってのは、いったい何だ？ということが、シン・ウルトラマンには描かれていたかもしれないです。そうやって人間のことを考え出すと、千年前の人間って、どんなことを考えていたのだろうって思えてくるのですが、なんと、千年前に人間がどんなことを考えていたかは、日本には『枕草子』として残されているのです。これはなかなか凄いことではないでしょうか。千年前の日本の女性が、ブログかツイッターみたいなことをしていたんです。そしてたぶんですが、千年くらい前にもメフィラス星人は地球に来ていたと思うんです。(あ、言っちゃった。)

私たちの知らないことは、まだまだたくさんあります。ただ一番に知らないこととは、私たち自身のこと、になるのでしょうか。そんなことを日々、考えています。